
十月休暇

逢坂十七年蟬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十月休暇

【Nコード】

N5772V

【作者名】

逢坂十七年蟬

【あらすじ】

整体師の僕と大先生が遭遇する、ちよつと不思議なお話。

松浦整骨院は毎年十月になると必ず、きっかり二週間の休みを取る。これは僕が就職する前から続いていることで、大先生おおせんせい以外はその間は別の整骨院に応援に行く決まりだ。

十月休暇が次週に迫ったある晩、僕は大先生に呼び出された。明かりを落とした診察室で書き物をしている大先生の背中とは、どこか鶴を思わせる。

「五島くん、休みの予定はもう決まっておるかね？」

「いえ、嫁と一緒に家でごろごろしようと思っています」

結婚してもう三年になるのに僕たち夫婦には子どもが出来る兆しもない。

夫婦水入らずと言えば聞こえはいいものの、嫁も僕も少し物足りなく思っている。

「そうか。それじゃ奥さんには悪いが、ちょっと付き合って貰おうかな」

もちろん給料は出す、上手くいけば特別ボーナスも出せるかもしれない、と大先生が付け加える。

悪い話ではなかったので、僕はその場で話を受けた。

嫁との自堕落な生活に未練がないわけではなかったけれど、ボーナスは魅力的だ。

財布の中身を確認する。

お詫びに嫁に買うケーキ代くらいは賄えそうだった。

大先生の施術道具を載せて長崎から車で半日、僕たちは島根県に漸く辿り着いた。
出雲大社に程近い、いすゞというひなびた旅館が大先生の定宿らしい。

祭りでもあるのか大社の周りには人だかりがあり、何だか賑やかだ。

「今年は幾分、忙しくなりそうだな」

チェックインもそこそここに大先生はいすゞの二階に簡易の施術室を設ける。

毎年の休暇はここで施術するためらしい。

大先生はてきぱきと準備を整え、僕は“施術承ります”という告知を旅館近くに貼って回る。

そうこうしている内に、最初の患者さんがいすゞ二階の施術室にいらっしゃった。

高貴な雰囲気を纏った品の良いご老人だ。

「お待ちしております」と大先生。

「いやいや、それはこちらの科白せりふだな。今年は案件がいやに多くてね。腰でも圧おして貰わないと纏まるものも纏まらないよ」と応じる老人は上機嫌だ。

筋を伸ばし、ツボを圧し、凝りを解す。

いつもより丁寧に大先生が施術を行い、老人は機嫌よく帰っていた。

その後も患者さんは絶え間なくやってくる。

結局店仕舞いが出来たのは日が落ちてしばらく経ったことだった。

「先生、今日の患者さんたちはどういう人たちなんですか？」

夜具を出しながら尋ねる僕に、大先生は悪戯っぽく微笑んだ。

「……神さまだ、と言ったら五島くんは信じるかな？」

○

次の日も、また次の日も、大先生の施術は続く。

最初は横で手伝うだけだった僕も、遂には施術に駆り出される。

丁寧に、丁寧に。

ただ患者さまの事だけを考えて、凝りを解していく。

肩、背中、腰、太腿、ふくらはぎ。

最初は擦るように揉み、圧を掛けて血流を良くしてやる。

強張った部分を温め、伸ばして本来の柔らかさを引き出す。

「おい、松浦まつらの。この若いのは豪く筋が良いがお前さんの跡継ぎか？」

僕に背中を押されながら、美人の患者さんが大先生に問いかける。

「いえ。五島くんは良い弟子ですが源氏の流れではありませんでな。渡辺の揉み手も私で仕舞いですよ」

残念そうな声で大先生が応えた。

「むう……揉み手は必ずしも源氏でなくても良いだろう。要は続けばよいのだ」

「その、続く方にも問題がありましたな」

「というと？」

患者さんは起き上がり、襟元を直しながら胡坐をかく。

寝ながら聞く話ではないと思ったのだろうか。

「五島くんの処は、子どもが出来んですよ。両親ともに健康なのです」

そういう大先生の顔は深刻そのものだ。

僕は口を挟もうとするが、大先生に目で制される。

「なんと、子が出来ぬとな？　確かにそれでは役目を連綿とするのは難しいか」

患者さんは瞑目して何事かをぶつぶつと唱え、僕の方を向いた。

「五島とやら、お主、これからも揉み手を続けるつもりはあるな？」

「は、はい」

美人の視線に圧倒され、僕は気圧されるように肯く。

その様子を見て、患者さんは満足そうに微笑む。

「よからう。そなたのことは覚えておこう」

○

二週間はあっという間に過ぎた。

入れ替わり立ち替わり訪れる患者さん相手に大先生と僕は休む間もなく施術を続けた。

その甲斐あって、最終日には患者さんたちも皆元気になったらしい。感謝の言葉とお礼の土産を車に満載して、僕たちは出雲を経った。

途中のパーキングエリアで、僕は気になっていたことを大先生に尋ねることにした。

「そういえば、特別ボーナスっていうのはどうなったんですか？」

「ああ、多分、上手くいったと思うぞ」

大先生がそう答えるのとはほぼ同時に、僕の携帯が鳴った。妻からだ。

何かあったのだろうか。

「はい、もしも……」

「あなた、子ども、出来たの、赤ちゃん！　妊娠二カ月！！」

僕は通話口を抑えて大先生の方を見る。

大先生は薄い頭を撫でながら、

「出たようじゃな、特別ボーナス」と微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5772v/>

十月休暇

2011年10月8日04時41分発行